
寄稿



豊かな自然に囲まれた種子島では、多彩なアウトドアアクティビティが楽しめます。写真提供：研修医

変容する馬毛島

わが前に桜島あり 西郷も大久保も見し 火を
噴く山ぞ

鹿児島出身の小説家「海音寺潮五郎」の歌であります。鹿児島の人々は、朝な夕な桜島を眺め生きてきました。

種子島の人々は、朝な夕な馬毛島を眺めながら生きてきました。勇気づけられ、励まされながら一生を終えました。2万年前の縄文時代より人が住み、草原で鹿を獲り、海辺で魚を獲り、野の草を食み生き続けてきました。四季折々の風景は我々を励まし、慰め、勇気を与え、心の支えでありました。

馬毛島は日本の無人島としては2番目に大きく、周囲16.5km、西之表から12kmのところであり、海拔70mほどの平坦な島であります。

種子島や屋久島とは、水深80mに満たない浅い海底で繋がり、黒潮が対馬海流と分離し、さらに大隅海峡を経る分流となる、九州にとってとても重要な地点となっています。この島は種子島や屋久島にとって最高の漁場であり、一つの漁礁の役目も果たし、漁民は「宝の島」と呼んでいました。トビウオの年間漁獲量が3千万匹に達し、日本一になったこともありました。

島のあちこちには、湧き出るたくさんの小川があり、渡り鳥の中継地ともなっていました。また、ソテツの自生群落があり、その分布の北限にあたります。また、自然の動物としてマゲシカが生息し、島内を疾駆し悠々自適の自然を楽しんでいました。

種子島を研究されていた民俗学者・下野敏見の言葉を借りれば、「馬毛島は種子島の人々の心の中に咲く美しい花である。種子島の人々はその花が萎めば、気が付かないうちに力を失うであろう。心の中に咲く一輪の花、種子島の人々は朝な夕なその姿を見て清められ、力が湧いて来たのである」と、書いておられます。

社会医療法人 義順顕彰会 会長 田上 容正

私は昭和44年、現在の種子島医療センターの建つところに小さな診療所を開院しましたが、若くして開院早々の医師が、馬毛島にあった小学校と中学校の校医をするという規まりにより、私も数年勤務した経験があります。当時は500人近い住民がいました。なかには動けない老人もあり、往診の依頼があり幾度となく馬毛島に往きました。海が荒れ大時化の時もありましたが、発熱、腹痛の治療にあたり、またマムシ咬傷などの治療にもあたりました。

時は移り、当時100世帯もあったのですが、人口減少の流れに乗り、昭和55年に完全な無人島になりました。

変容していく馬毛島を朝夕に眺め暮らしてきた人が数多くあると思いますが、私も同じように悲しい思いに駆られながらも、生き続けなければなりません。折にふれ詠んだ短歌を何首か掲載させていただきます。

海の藻の豊かなりける馬毛島の海域^{うみ}飛び魚小屋の賑わいしかの日
 馬毛島はひとつの大きな漁礁^{ぎょしょう}なり漁師らにとり生命の島ぞ
 朝夕^{あさゆふ}に目交^{まなかひ}に望む馬毛島の島心^{しまこころ}の島よ永遠^{とわ}にあれかし
 右は種子島^{たね}後方は屋久島^{しりえ}で開聞^{やく}に頭抱^{こうべいだ}かる愛し馬毛島^{いと}
 夕映えにくきりと浮かぶ馬毛の島その影^さ差して飛び行く数羽
 幼児^{おさなご}に添寝^{まげ}するがに馬毛島と種子島^{たね}いつの世までも平和であれかし
 緑なす草原のなか馬毛鹿が疾駆^{しきく}しており活気に満てり
 馬毛島に点在^{みずたまり}したる水溜渡り鳥らが羽を休めり
 一斉^{いつせい}に馬毛島めざす漁船^{りょうせん}は飛魚の湧く季節になれば
 漁礁^{くい}には杭の打たれて馬毛の沖魚^{いずく}は何処に隠れたるらん
 雨あがりくっきり浮かぶ島肌に見るも無残な傷痕の見ゆ
 草木^か枯れアスファルト^{うず}にて埋めらる魚は何処^{いずく}に逃れたるらん
 この島がこの島がかと眺めつつ車走らす昼の国道
 もう二度と見ることぞなき馬毛の島海^{あお}の碧さも空の青さも
 校医とし奉仕せし島馬毛の島あの子等^{いずく}いまや何処に
 馬毛島に二万年前人住んだとう歴史の流れ胸に迫れり
 漁礁なる宝の島だ馬毛の島いついつまでも変わらなまほし
 貴重なる文化財なり馬毛島はそっとときよ保存しようよ
 兵士^{みたましず}らの魂鎮めん馬毛の島戦艦大和は真西に眠る
 朝夕に眺め暮らせし馬毛の島いま変容^とを遂げんとすなり

丸坊主

病院長補佐／眼科部長 田上 純真

懐かしい昭和59年の2月のこと。

小学六年生の哲郎はL中学校の入学試験に合格した。L中は全国でもトップクラスの難関私立中として有名な学校である。

そのころ日本では、東京ディズニーランドがオープンしたり、任天堂からファミコンが発売されたり、NHKで『おしん』が大人気となったり、田中角栄がロッキード事件でつかまったりした。子供がたくさんいて、いちばん日本が元気で豊かだったと言われていた時代。

哲郎の父親は、いなかで小さな診療所をひらいていた町医者だった。そんな家庭環境や当時の世の中の風潮のせいもあって、哲郎は小学三年生のときから有名な進学塾に通い、六年生まで受験勉強を続けた。大人たちは、そんな子供たちの頑張りをガリ勉、スパルタ教育とからかっていたけど、夏休みも冬休みも春休みもなく、受験生たちは何かにとりつかれたかのように一所懸命勉強し、毎週テストを受けては順番を競っていた。

じつは哲郎がL中学校に入りたいかったのには、坊主頭になりたくない、というもうひとつの切実な理由があった。もし近所にある公立の中学校に入学するとなると、男子は入学式までに髪の毛を五分刈りにするのが決まりで、それをのがれるには私立中学校に合格するしかなかったのだ。

それまでの哲郎のヘアスタイルはというと、幼いころからきれいな坊ちゃん刈りで、いかにも優等生って感じだった。ひそかに女子の目を、けっこう気にしていた哲郎は、かけっこのときサラサラの髪の毛がきれいにそろってふわりとなびくように、走り方を工夫していた。好きになった女子には、少しでもぼくのことを気にしてほしい。あわれな男子たちはその子のスカートをめくったり、おもしろいことを言って笑わせようと必死だった。たまにそんな涙ぐましい努力が実を結んで、クラスメイトの女子から「私、てっちゃんのが好きよ」、なんて告白されることもあったけど、それで何となく浮かれていたら次の日の朝、登校するといきなり平手打ち、あんたなんか絶交よってこともよくある話だった。

丸坊主になれば、ますますモテなくなってしまうんじゃないか。それだけは何とかして避けねばな

らぬと、哲郎はせっせとたくさんの漢字を覚え、むずかしい計算問題を解いた。バレンタインデーにチョコレートを何個もらえるかという争いごとに、ほとんどの男子が命を懸けていた、そんな昭和50年代のころ。

よこしまな理由があったとはいえ、がんばったかいあって、哲郎は入学試験に合格したので坊主頭にならずにすんだし、親戚とかたくさんの大人に「すごいね、よくやった、大したもんだ」とお祝いの声をかけられてすっかり有頂天になっていた。自慢のサラサラ坊ちゃん刈りもそのままに、銀ぶちメガネをかけた哲郎は、満開に咲きほこる桜の花びらが舞い散るなかを、L中の門を悠々とくぐり、入学式へ向かったのであった。

それから月日は流れて、平成3年の冬。

哲郎は2年目の浪人生活を送っていた。彼は父親に、絶対に国立大学の医学部に入るように、それ以外は許さんと命じられていた。振り返ると中学校の6年間、哲郎はそれまでの猛勉強の反動でまったく勉強をしなくなってしまっていた。それどころか、仲のいい同級生や先輩の影響で丈の短い変形した学生服を着て、ちょっとヤンチャな遊びをするようになっていったから、成績もみるみる下がっていくのだった。勉強なんて、なんのためにしなくちゃいけないんだろう。

見えない自由が欲しくて、見えない銃を撃ちまくる。高3にもなると授業が難しくてちんぷんかんぷんになり、その代償は浪人生として払うことになったのであった。しかし浪人生となり予備校に通ってはみたものの、ついついギャンブルに手を出してみたり、寮を脱走しようと仲間と計画を立てたり、どうしようもない無益な生活で1年を棒に振ってしまっていた。

そのような体たらくで、一浪目の受験もあっさりと失敗に終わり、さすがに哲郎はこのままではいかんと思うようになった。両親はすでに呆れ果てて、期待に全く応えない息子に親不孝者だと愚痴をこぼしている。L中に受かったときはたっぷりほめてくれた兄弟や親戚にもプレッシャーをかけられて、哲郎はようやく普通の浪人生らしく一応勉強に取り組むようになった。

小学生時代、あんなに毎回テストで満点を取っ

て天才ともてはやされ、サラサラの坊ちゃん刈りをふわりとなびかせて好きな女の子にこびていた、毎日をキラキラと生きていた哲郎の面影はきれいさっぱりなくなってしまった。浪人生とは、未来になんの保障もなく先の見えない不安な日々を、悶々としながらとりあえず鉛筆や蛍光ペンを走らせて暮らしていくものである。

予備校のある下流のほうへ、町をゆるやかに流れる川べりを自転車をこいで、のろのろと向かっているとき、哲郎は生きることの意味について、キラキラと太陽の光を弾く川の流れを眺めながらぼんやり考えるのだった。浪人生の身なりはおおよそみすばらしいもので、どこか肩身の狭さや不安な心持ちを隠しきれない。白いTシャツの襟首はよれよれで、くたびれたスニーカーのひもは千切れて自転車のペダルによく絡みついた。

哲郎はこれまでの人生でもっとも落ちぶれて孤独だったが、かと言って父親に反発して家を飛び出す覚悟などないことは自分でもいちばんよく知っていた。いずれにせよ来年もまた浪人するのは嫌だし、何とかしなければ恰好がつかないよな。哲郎は3回目のセンター試験の問題集を開いて、毎日薄暗い自分の部屋で、小さな楕円形の白丸を何百回も何千回も塗り潰したので、自慢の坊ちゃん刈りはいつからか伸び放題でくしゃくしゃに乱れていた。

1月になり、冬の寒さは浪人生にはよけい身に染みた。その年から医学部の二次試験を受けるために、センター試験の点数を78パーセント取らなければならなくなっていた。つまり900点満点なので、702点以下だと「足切り」といって受験資格がなくなるのだ。センター試験が終わった日の夜、哲郎は持ち帰った答案用紙を自己採点したが何度数えても694点しかなかった。あんなに毎日必死に問題集を解いたのに、あと8点足りない。どうしてあと2、3問でいいから正解できなかったのか。1年間自分なりに努力したけれど、現実はいくつも残酷だった。

さすがに打ちひしがれた哲郎は、翌朝結果を聞きに出てきた父親に今年も受験に失敗したことを話した。何しろ医学部の試験に落第するどころか、受けることすらできなかったのだ。すると父親は平静を取りつくろうことができず、声を震わせて、情けない、恥ずかしい、お前は一体何を考え

ておるのだと、腕組みをして問い詰めた。父親の期待に応えられなかったことに対する申し訳ない思いと、自分の考えや気持ちを尊重してもらえない悲しみ。しばらくの間、涙を流すこともなくただうつむいていたが、胸につまったなまりのように暗く重い負の感情に耐えられなくなったのか、哲郎は家を飛び出した。

僕はこれから先どうしたらいいんだろう。
いつになればこの暗闇から抜け出せるんだ？
気がついたら僕のそばには誰もいないじゃないか。

1月の空はいつものようにうす水色に広がり、遠いどこかの国へ向かって飛行機がゆっくりと白いすじ雲を描いていた。のんびりと犬の散歩をしている老夫婦や、忙しそうに配達に向かうクリーニング屋の軽バンとすれ違いながら哲郎はしばらく路地をさまよい歩いた。目がチカチカして、今にも倒れそうによろめきながらなんだか意識が遠くなっていく。

どれくらい経っただろうか、ふと気がつくところでは近所の理髪店の、黒い革張りの椅子の上であつた。オーデコロンの香りがつんと鼻をくすぐり、目の前の大きな鏡には、生まれて初めてきれいな五分刈りになった、見たこともない坊主頭の自分が映っていた。後ろでは、バリカンを片手に店主のオヤジがいたたまれない表情でたたずんでいる。鏡の中の哲郎は、菩提樹の下で悟りを開いたお釈迦さまのように微笑みながら、こっちにおいでと手招きをしていたのだった。理髪店の扉を開けて店先の赤と青のらせん模様がくるくる回る看板を見ながら哲郎は思った。この坊主頭を見せて、頑張るからあと1年浪人させてください、とお父さんに頼んでみよう。

家に戻ると、しばらくして仕事から帰ってきた姉が哲郎を見てそのクリクリとした坊主頭に驚いたので、試験がダメだったから床屋さんにやってもらったんだと話した。姉はそりゃ大変だったねえ、お父さんも言い方がきつすぎるのよ、と少し同情するように言いながら、しかし哲郎の刈りたての頭を無性に触りたそうにしている。哲郎はゲームのコントローラーを親指でカチャカチャ押しながらテレビに映ったファイナルファンタジーの戦闘画面をぼんやりと見ていた。ズバーンと音がして、哲郎の唱えた呪文が一撃で敵を真つ

二つに切り裂いた。ゲームの中だけは、哲郎はいつも壮大な冒険の主人公だった。

姉が我慢できずにそっと哲郎の頭を撫でようとしたとき、ピンポンとインターホンの呼び鈴が鳴った。姉がタイミングの悪さをぶつぶつ言いながら玄関のドアを開けると、郵便局の配達員が無表情で立っている。玄関のほうで書留です、ハンコをくださいとやりとりしているのを哲郎はぼんやりと聞いていたが、戻ってきた姉があんた宛だったわよと茶色い封筒を放り投げて渡してくれた。封筒の端をビリビリと破くと中には薄い黄色のカードのようなものが入っていて、それはなんと、受験番号63番と印刷された医学部の二次試験の受験票だった。いったい何が起きているのか、哲郎にはよく分からなかったが、とにかく、とりあえず医学部受験はできることになったらしい。

キツネにつままれたような哲郎の表情に、坊主頭はとぼけた感じを引き立ててなかなかよくマッチしていた。もはや喜んでいいのか、それとも悲しんだほうがいいのか、哲郎はわけがわからなくなってしまった。そんなことより、タイムマシンがあったら、必死こいて勉強している小学六年生の自分のところへ行って教えてやりたいよ。キミねえ、どうせ二十歳になったら結局、自主的に丸坊主になってしまうんだよ……

それからちょっとまた時間が経って、平成4年の春。

とある大学のキャンパスに例年通り桜の花は咲き乱れていた。どこかで、ホトトギスがのんきにホーホケキョと歌っている。まだ少し冷たい春風がピュッと吹いて、ピンク色の花びらが舞い散り、そのひとひらが少しだけ伸びていかんともしがたい坊主頭の上にぴたっとくっついた。哲郎はそんな自分の頭を撫でながら、背中を丸めてコソコソと申し訳なさそうに医学部の門をくぐり、新入生へのオリエンテーションがある教室に向かった。春の空にはまた小さな飛行機が、どこへ行くのだろう、すじ雲をチリチリと伸ばしながらはるかな旅路へ飛んでいった。

令和7年度鹿児島県医師会会長賞(看護業務功労)受賞に寄せて

看護部長 園田 満治

令和6年度の鹿児島県医師会会長賞(看護業務功労)は、山口一江さん、戸川英子さんが受賞されました。

外来 准看護師 山口一江さん

山口さんは、老健わらび苑で勤務した後、同法人の種子島医療センターに勤務。病棟看護や透析室勤務を経て、現在は外来で泌尿器科を担当するほか、夜間救急外来にも対応され、向上心を持って学び続ける姿勢と温厚な人柄で、患者さんや職員から厚い信頼を得ています。

結婚を機に種子島へ移り住み、今年で27年目。専業主婦を経て、知人から声をかけられたことをきっかけに、わらび苑へ入職されました。また、6歳の時に急性虫垂炎で入院・手術を経験したことが、看護師を目指すきっかけになったそうです。

このたび功労賞を受賞し、「小さい頃からなりたかった看護師として、このような賞をいただけて光栄です。支えてくださった皆さんと4人の子どもたちに感謝しています」と話してくれました。

「感謝の気持ちを忘れず、患者さまに寄り添える看護を目標に、これからも精進したいです」と語る山口さん。長年にわたり、地域医療を支える存在として尽力されています。

経営企画改善室室長兼看護師 戸川英子さん

戸川さんは、平成28年から令和5年3月まで看護部長を務めた後、経営企画改善室長を経て、令和8年度から企画推進室長として勤務されています。

大阪の病院に勤務した後、26歳で種子島にUターンし田上病院へ就職、その後11年間の専業主婦を経て、40歳で再び田上病院へ復職されました。

コロナ禍では、院内の感染対策だけでなく、周囲の施設や市町と連携しながら、島民の皆さまの感染予防に尽力されました。現在は、市民公開講座の企画・運営や学生の職場体験、求人活動などにも力を注いでいます。

「仕事もプライベートも一所懸命。家族や友人、恩師、上司や同僚、職員の方々に支えられ、患者さんをはじめ多くの方々と関わらせていただいたことが、自身の一番の財産です」と話す戸川さん。長年にわたり、島民の皆さまが安心して医療を受けられる環境づくりに貢献されています。



右から田上寛容理事長、戸川さん、山口さん

種子島医療センターでの診療を振り返って

整形外科副医長 吉元 秋穂

2024年4月より1年半、種子島医療センター整形外科で勤務させていただきました。これまで鹿児島医療センター、鹿児島大学病院等の大きな病院でしか勤務したことがなかったため、離島での医療がどのようなものか不安もありながら赴任してきた記憶があります。一方で、私は0歳から3歳まで南種子町に住んでいたことがあったため(父親が南種子高校の教員をしていた関係で)、久々に生まれ育った故郷で生活ができることを楽しみにもしておりました。

当院外来は毎日数多くの患者さんが来院しており、初めは長椅子にずらっと座っている患者さんの数を見て圧倒されました。当院が島の医療を支えていることを強く実感しました。最初は不慣れでなかなか早く外来を回すことができず、スタッフには面倒をかけてしまいましたが、1年半経つと患者さんの顔も覚え、楽しく外来を行うことができました。

手術に関しては、外傷を中心に多くの症例を経験することができました。高齢者の転倒による骨折が多かったものの、馬毛島勤務者の労災による高エネルギー外傷も時々あり、年間80～90例ほど執刀することができました。今後しばらくは種子島だけでなく馬毛島の医療も支える必要があり、当院での手術件数は増えていくのだろうと感じております。

また、当院は種子島唯一の救急指定病院であるため、日当直では様々な症例を経験することができました。時には重症例でヘリ搬送を行う必要がある症例も経験しました。離島医療の現状、ヘリ搬送の問題点等、多くのことを学ばせていただきました。当院は他科の先生との垣根が低いおかげで、たくさん相談することができ、忙しい日当直も頑張ることができました。プライベートでは職員の皆さんとたくさん飲み会に行ったり、観光地に行ったり、楽しむことができました。西之表市の運動会にも参加させてもらい、良い経験になりました。

改めまして、整形外科の先生をはじめ、当院職員の皆さまには大変お世話になりました。種子島で過ごせた1年半、とても楽しかったです。新天地でも頑張ります！

種子島医療センターでの診療を振り返って

脳神経外科医長 木佐貫 彩

種子島医療センターで脳神経外科診療に携わった日々を振り返ると、離島医療という環境の中で、脳神経外科医として多くの経験を積ませていただいた時間であったと感じています。限られた医療資源の中で診療にあたることは容易ではありませんでしたが、その分、一つひとつの症例に真摯に向き合う姿勢を学ぶことができました。

脳卒中や頭部外傷など、緊急性の高い疾患では、初期対応や治療方針の選択が患者さんの転帰に大きく影響します。救急外来での限られた時間と情報の中で、画像所見や神経学的所見を総合的に判断し、島内での対応が可能か、あるいは島外搬送が必要かを決定する場面を数多く経験しました。天候や搬送手段といった離島特有の条件を考慮しながらの判断は、若手医師として多くの学びを与えてくれました。

また、急性期を過ぎた後の慢性期・回復期診療では、患者さんの生活背景や家族の思いを踏まえた関わりの重要性を実感しました。退院後も島での生活が続くことを前提に、再発予防やリハビリテーション、日常生活への影響について十分に検討し、転帰先を検討していくことが求められました。患者さんやご家族と継続的に向き合う中で、地域医療ならではの距離の近さを感じると同時に、医療者としての姿勢を見つめ直す機会となりました。

こうした脳神経外科診療を支えてくださったのは、看護師、技師、リハビリスタッフ、救急隊、事務職員の皆さんをはじめとするコメディカルの方々でした。夜間や緊急時にも迅速に対応していただき、職種を越えた連携の中で診療を行うことができたことに、心より感謝しています。離島医療の現場でチーム医療の重要性を実感できたことは、今後の診療においても大きな財産になると感じています。

すべての症例で満足のいく結果を得られたわけではありませんが、患者さんやご家族と向き合いながら悩み、考え続けた時間は、脳神経外科医としての基礎を築くうえで欠かせない経験でした。種子島医療センターで培った学びを今後の診療に生かしていきたいと考えております。

これまで支えてくださったすべての皆さまに深く感謝申し上げますとともに、種子島医療センターのさらなる発展を心より願っております。

種子島医療センターでの 診療を振り返って

糖尿病内科医長 中村 香織

2022年10月から半年間、種子島医療センターで勤務させていただきました。鹿児島大学病院での勤務を経て、2024年4月より再びこちらに戻ってまいりました。振り返ると、あっという間の2年間でした。通算2年半に及ぶこの島での時間は、かけがえのないものとなりました。

地域の特性上、専門の枠を越えて幅広い内科疾患を経験させていただきました。限られた医療資源の中で診療にあたる日々は、地域の実情を踏まえた判断の重要性を学ぶ機会となりました。他科の先生方や看護師、コメディカルの皆さまと日常的に意見を交わしながら診療を進める中で、垣根を越えて相談できる環境の大切さを実感しました。

糖尿病診療では、ここ数年で治療の選択肢が広がっています。持続血糖測定機器(リブレ)の普及により、患者さん自身が血糖変動を把握しやすくなりました。また、週1回投与の持効型インスリン製剤であるアウィクリが使用可能となったことは、離島医療の現場において新たな可能性を感じさせる出来事でした。特に訪問介護を利用中の患者さんにとって、投与回数を減らせることは大きな助けになると感じました。治療の進歩を地域の実情の中でどのように活かすかを考えた経験は、大きな学びとなりました。

一方で、慢性疾患管理の基盤は日々の生活にあります。患者さん一人ひとりの背景に目を向け、継続可能な形を共に考える姿勢の大切さを、この島で改めて実感しました。顔の見える関係の中で診療に向き合えたことは、私の医師としての礎になりました。

診療の合間に見上げたロケットの打ち上げ、千倉の岩屋で体験した洞窟プラネタリウムの満天の星空、医局のバーベキューで交わした何気ない会話、そして鉄砲祭りの踊り連に参加したこと。種子島ならではの出来事は、いずれも心に残る大切な思い出です。

この島を離れることに寂しさもありますが、ここで得た経験と出会いは、今後の診療を支える力になると信じています。各科の先生方、スタッフの皆さま、そして地域の皆さまに心より感謝申し上げます。種子島医療センターのさらなる発展と、地域の皆さまのご健勝をお祈りし、結びとさせていただきます。

令和7年度 臨床研修医 種子島医療センターでの研修を終えて

2025年度は27名の研修医の方々が当院で研修をされました。
感想文はこちらのQRコードからご覧いただけます。



鹿児島大学病院 勝山 ビタリー
(研修期間:2025年4月、5月)

福岡大学病院 五貫 律都
(研修期間:2025年4月)

福岡大学病院 工藤 滉大
(研修期間:2025年4月)

いまきいれ総合病院 多田野 真央
(研修期間:2025年5月)

鹿児島医療センター 原田 聞
(研修期間:2025年5月)

鹿児島医療センター 仲田 圭秀
(研修期間:2025年6月)

済生会 松山病院 重見 侑弥
(研修期間:2025年6月)

福岡大学病院 間部 彩
(研修期間:2025年6月)

鹿児島医療センター 土持 友香
(研修期間:2025年7月)

鹿児島医療センター 中村 佳帆
(研修期間:2025年7月)

鹿児島医療センター 堀之内 莉奈
(研修期間:2025年7月)

済生会 松山病院 武井 健悟
(研修期間:2025年8月)

鹿児島医療センター 村橋 暁
(研修期間:2025年8月)

鹿児島医療センター 森元 桃衣
(研修期間:2025年8月)

いまきいれ総合病院 蛭川 寛之
(研修期間:2025年9月)

鹿児島大学病院 河野 史也
(研修期間:2025年9月)

北海道大学病院 芝野 良紀
(研修期間:2025年9月)

いまきいれ総合病院 楯 晃太郎
(研修期間:2025年10月)

福岡大学病院 中山 瑞季
(研修期間:2025年10月)

福岡大学病院 来仙 雄生
(研修期間:2025年10月)

北海道大学病院 小澤 健人
(研修期間:2025年11月)

福岡大学病院 長瀬 愛
(研修期間:2025年11月)

福岡大学病院 森 悠
(研修期間:2025年11月)

福岡大学病院 大島 理桜
(研修期間:2025年12月)

福岡大学病院 菊池 恵里花
(研修期間:2025年12月)

福岡大学病院 中西 祐陽
(研修期間:2025年12月)

福岡大学病院 岩城 葉奈
(研修期間:2026年1月)